

## 《仕事(目の前のこと)にはベストを尽くす》 2014.6 月

最近、お客様の社員さんと面談させていただくことが増えてきております。皆さん様々なことでお悩みをお持ちです。本音を探っていきますと、割と多くの方が実に安易に会社を辞めようと思っていらっしゃることに驚かされます。その多くは、原因は外部、つまり自分以外にあると考えていらっしゃいます。そのようなケースで私が話しすることは、ご本人が原因と考えている部分に焦点を当て、凝り固まったその方の視点を別の角度から見ていただくことです。別の角度から原因を見つめるイメージを持っていただくことによって、多くの方が、「自分は利己的であった」、「一方的な見方をしていた」と気づいてくださいます。

普段は滅多に社員の立場の方の労働問題の相談は受けないのですが、お客様の身内などで、特に依頼されて面談や電話による相談を受けさせていただくことがあります。

その中でも、最も多い事例が、

- ① 会社を辞めさせられることになった
- ② 経営者に嫌われたようだ
- ③ 私は悪くない、腹の虫がおさまらない
- ④ 不当解雇に該当するので、会社を訴えたい
- ⑤ いくら位相手からお金を取れるか教えてほしい

といった流れになります。これは、一般的に当社がお客様からお受けするご相談の内容と正に一致するものです。

このような場合、私は、最初は相談者のガス抜きを行うためにその方のお話と同調し、むしろ私の方が怒りのエネルギーを放出することによって、自分を相談者と同じ気持ちになるようにします。すると相談者は少し落ち着いてきます。その段階で、実に多くの方が同じような悩みを抱えていることを情報としてお伝えします。そうすると悩みを抱えた相談者は、苦しんでいるのは自分だけではないのだと安心し、冷静になってきます。相談者の怒りを放出させることが出来れば、そこからは、上記①～⑤を今度は相手の立場で考えるように促します。

労働問題の実に多くがコミュニケーション障害やちょっとした思い違いを放置したために起きています。古今東西の歴史の中で戦(いくさ)に負けるパターンと驚くほど共通しています。

<負ける人(負け戦)の敗因(原因)>

- ① 情報不足
- ② 慢心
- ③ 思い込み

更に判断の基準は好きか嫌い(損か得か)となっています。

問題の解決を図るうえで最も大きなポイントは、本人が問題だと認識していることが、実はたいした問題ではないのだということを理解してもらうことです。原因が相手にあると思っているから怒りをコントロールできなくなるのです。その原因が実は自分の情報不足による思い違いであったことが分かり始めると、徐々に怒りの感情は鳴りを潜め、贖罪や反省の感情が湧いてきます。人は自分の鏡であり、自分が「嫌い」という感情を持つと、そのエネルギーは必ず相手に伝わります。そして実害となって自分に返ってくるのです。

このあたりまでご理解いただくと後はスムーズに流れていきます。

<例>

- ① 「今後もこの地域でお住まいになるのですか？ もしそうであれば、仮に慰謝料や損害賠償金を200万円とれたとしても、残りの人生40年:480か月で考えてみると、1日あたり140円弱ですね」
- ② 「1日ペットボトル一本と引き換えに、このエリアで嫌な噂を立てられたり、会社の人とスーパーなどで出会うたびに、相手を避けたり、不快な思いに襲われたり…割に合わないですね」
- ③ 「ここは大人になって、笑顔で「お世話になりました！」と言って、立つ鳥跡を濁さずを実行したら、相手は、「しまった、良い人材を失った」といったことにはならないですかね…」

今まで数十名のご相談をお受けしましたが、会社を訴えた人は今のところ一人もいないようです。

次に会社を辞める際の重要なポイントをお話しすることが必要となってきます。

社長は会社を辞めることが出来ません。その意味では誠に気の毒です。一方、社員はいつだって辞めようと思えば辞められます。いつも退路は開かれているのです。それだけに大した努力もせず、安易に辞めてしまいます。ところが、「楽あれば苦あり、苦あれば楽あり」の諺(ことわざ)の通り、転職、転職でステップアップどころか、ステップダウンしていく方が後を絶ちません。誠に気の毒です。

会社には<辞め時>というものがあります。それは誰がしても同じ条件下において、他人がどうこうではなくて、会社の問題がアレコレではなく、その中で

- ① 「自分の能力をどこまで発揮出来たのか？」
- ② 「本当の自分(良心)を納得させることが出来るか？」

③ 「本当に自分は最大の努力をしているのか？  
(ベストを尽くしたのか?)」

が、最大の焦点となります。要するに、自分自身との真剣勝負をすること、或いはしてきたかということが重要なのです。

この①～③を継続して実践していくと、自分が順調に仕事で伸びていくか、或いは卒業時期に近づいてきて、そこを辞めるのかとなってきました。①～③の実践の延長線上で辞めることになった場合の特徴は、「まったく悩まない」ことです。

私が6年前に大企業を辞めることになった時も、辞める時期が来たとの運命からのメッセージを受け取りました。辞めると決めて一晩だけ考えましたが、寝ているときに、<辞めるんだ！>との強いメッセージを潜在意識から何度も受けました。普段慎重な自分が、不思議なほど前向きな気分となり、朝起きた時には頭がすっきりとし、先のことへの不安は全くなき、「ああ、辞めよう！」と思えました。その時には、仕事はやり切ったという達成感とともに、これっぽちの後悔もなかったことを覚えています。

人は、<辞め時>がきたとき、どんな形であれ自分が本当にやり切ったならば、悩まずに辞めることが出来るようです。

だから転職を「悩む」ということは、その時点で、

- ① まだまだリスクもあるし、
- ② その職場で自分がまだやり切っていない証拠であり、
- ③ 自分が逃げていると認識し、
- ④ 自分の本心(良心)が許してはいないと受け止め、転職を思いとどまった方が良いとのメッセージであると認識すべきです。

本当の<辞め時>とは、

- ① その仕事に全身全霊をかけて、ベストを尽くしている時であり、
- ② 既に次にやるべきビジョンが明確であり、
- ③ 自分と自分の将来に対して揺るぎのない信頼感を持っている状態の時です。

<今、目の前にあること、今、目の前にいる人に全力を尽くしましょう。

道が開けます！>